「アクティブ・ラーニング（能動的学習）」。昨年12月、中教審の答申で言及され、高校教育改革の一つとして、注目度が急激にアップした学習方法だ。開校時から実践する進学校、生徒集めの切り札に地域ぐるみで取り組む学校など、現場を訪ねた。

ディスカッションを実践・ラーニング

「この商品、価格は980円。同様の商品は数十社から出ていますが、他社と比べて安い！　たとえばS社では……」

1年生の高橋英航さんが、教室の前に出て、はきはきと説明する。

ラジオボイスレコーダーの営業マンが商品をPRするという設定。私立の中高一貫校・栄東高校の土曜講座のひとコマだ（38ページ写真）。

毎年難関大に合格者が多数輩出する埼玉県内有数の進学校である同校は、「アクティブ・ラーニング（AL）」に力を入れている。

ALとは、米国で提唱された学習方法。グループワーク、ディスカッションやディベート、プレゼンテーションなど課題解決型の学習を通して、生徒自らが能動的に学んでいくというものだ。大学教育で実践されていたが、文部科学省の推進もあり、初中高等教育の現場でも広まりつつある。

同校では、1978年の開校時から、「創意工夫して、生徒が主体的に学ぶ力をつける教育」をモットーに掲げてALに取り組んできたという。

アドミッションセンターの市原貴紀教諭は、

「時間や手間がかかりますが、自律的な学習態度が自然と身についていきます」

と効果を話す。

3年前から始めた高1・高2生が対象の「土曜講座」もALの一環だ。

今年度は39講座あり、ほとんどが20人以下で行われる。テーマは「社会の仕組み（企業の戦略）」「生活の中のゲーム理論」「目指せ未来の建築家」など、従来の高校教育のイメージとは違う魅力的な講座名が並ぶ。

「生徒は2年間でさまざまな分野をバランスよく学び、講座の最終段階では、選ばれた講座の生徒が、体育館でプレゼンテーションをします」（市原教諭）

その中の「プレゼン・ファンタジーⅢ」を見学した。

「君たちは今から営業マンになります」

担当の齋藤皓之教諭はこう話すと、ラジオボイスレコーダーの商品説明のプリントを配った。

生徒たちはグループに分かれ、セールスポイントについて活発に話し合った。

「もっとプレゼンが上手になりたかったんです」

講座を選んだ理由をこう話すのは、冒頭で紹介した高橋さんだ。

小4から中2までロボット製作やプログラミングを学び、自分が製作したロボットの発表を通じて、プレゼンの大切さも知ったという。

「この講座はプレゼンの基礎から学べるので楽しい」

齋藤教諭は昨年の例を挙げ、こう話す。

「最初は発言が少ない生徒も4～5回目からは積極的にかかわるようになり、目に見えて変わってきます」

同校は中1から通常授業にもALを取り入れている。

たとえば数学では、グループワークでサッカーボールの展開図を考えたり、理

左／大阪府立能勢高校の「よのなか科」の授業の様子（同校提供）。右／栄東高校の土曜講座「地震・火山の本質を学び、防災の重要性を他者に伝える」。千葉大学の准教授とともに、三宅島で火山学を学ぶ（同校提供）

ディベート

プレゼンテーション

主体的な学び アクティブ

大阪府立能勢高校の「よのなか科」の授業

（2014年10月～15年２月。全10回）

① 制服問題をディベートする
② 英語を公用語にすべきか？
③ 土曜授業を復活すべきか？
④ キミが学校の校長だったら？
⑤ ケータイ／スマホとどう付き合うか？
⑥ 地域おこし（能勢高校独自）
⑦ 先生に通知表をつけるとしたら
⑧ お金ってなんだろう？
⑨ 自分に合った仕事を作り出す
⑩ 公平とはなにか？　700/800問題

公平を考える700/800問題とは？

実際に避難所で起こったケースをもとにしたロールプレイ。あなたの役割は避難所の責任者。避難所となった体育館で暮らす住民は800人。ボランティアが持ってきたロールケーキは700個。実際に起きたケースでは、「700人にしか配らなかったら不公平になる」という理由での、まさかの受け取り拒否。いかにして「公平」を保つか？「受け取り拒否」以外の選択肢を考えてみよう。

【選択肢の例】

1：持病で甘いものを食べられない人、ダイエット中の人、甘いものが嫌いな人、半分でいいという人もいるだろうから、まず、希望をとってから配る。

2：半分に切ると1400個。800人に配って余った600個を半分に切れば1200個。800人に配って余った400個を半分に切れば800個で、公平に分配できる

3：綱引きや玉入れなどの娯楽を行い、ケーキを景品にする

科では年間１００回以上の実験をしたり、地歴・公民では校外でグループ研究やプレゼンをしたり。

「こうしたＡＬを通じて、生徒たちは考える必要性を知り、過程を楽しめるようになりました」（齋藤教諭）

公民に代わる「よのなか科」

同校は２００９年から毎年10人前後の東大合格者が輩出し、今年も９人が合格した。

大学のゼミなどが主な舞台だったＡＬが注目を集めたのは、昨年12月、文科相の諮問機関、中央教育審議会（中教審）の「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」にＡＬが挙げられたことが大きい。

さらに答申の「大学入試センター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に『思考力・判断力・表現力』を中心に評価する新テストを導入する」との内容が、ＡＬと密接に結びついている。

駿台予備学校進学情報センター長の石原賢一さんは、「大学入試が変われば高校教育も変わります。現在の中１生が受験する20年の新テストでは、ＡＬで鍛えられる思考力や判断力、表現力を中心に評価されるため、今後、ディスカッションやプレゼンなどを取り入れた授業の導入が進むでしょう」と分析する。

ＡＬの先駆けといわれるのは、教育改革実践家の藤原和博さんが提唱した「よのなか科」だ。

「97年ごろに手に取った公民の教科書がまったくおもしろくなかった。これでは、中高生が世の中を嫌いになると思ったんです」

藤原さんは、98年に宮台真司さんとの共著で、中高生向けの『人生の教科書 よのなか』を、99年に『人生の教科書 ルール』を出版。

00年から東京都足立区や杉並区の中学校でゲストティーチャーとして、よのなかについて話し、03年に杉並区立和田中の校長になったとき、「よのなか科」の授業を始めた。

栄東高校の土曜講座「プレゼン・ファンタジーⅢ」。2分30秒で商品をPRする（撮影：庄村敦子）

「正解のない問題をみんなで考えることによって、正解主義を壊したいと思ったんです。最初は、下を向いてまったく発言しなかった生徒に、『意見を戦わせることは人格を否定することではない』と説明し、ディスカッションやディベートの授業を続けていると、次第に慣れてきて、意見を言えるようになった。先生が一方的に知識を詰め込む授業を減らして、ALの授業を増やしてほしいですね」

藤原さんの「よのなか科」の授業の様子は『たった一度の人生を変える勉強をしよう』（朝日新聞出版）に詳しい。

また、藤原さんの「よのなか科」の授業は、昨年からオンライン予備校「受験サプリ」（リクルートマーケティングパートナーズ）で、計51の講座が見られる。

ALを、「過疎化などで生徒集めに苦労する学校の切り札の一つ」ととらえる動きもある。

大阪府立能勢高校。最寄りの能勢電鉄妙見口駅から田園風景や古民家を眺めながらバスに揺られること約20分。バス停からさらに徒歩約10分で、背後に里山がそびえる同校に着く。

国際交流にも力を入れ、今年度は文科省からスーパーグローバルハイスクールに指定された同校でも、過疎・少子高齢化の影響は大きい。直近10年で定員割れしなかったのは1年だけ。

同校では昨年から「受験サプリ」の藤原さんの受験映像授業を活用し、「よのなか科」の授業を始めたという。

真鍋政明校長は話す。

「ここは日本が抱える課題の先進地域ともいえます。『よのなか科』は、高校に魅力を持たせ、教育で町おこしをする取り組みのひとつと考えています」

同校は、04年から能勢町立東中学校・西中学校との連携型中高一貫校となったが、高校進学時に半数以上の生徒が町外の進学校などへ出ていくという。

消極的な生徒もどんどん発言

こうした現状を変えようと10年、同窓生らが中心となり、「能勢高校を応援する会」を結成。結成総会で藤原さんが講演したのがきっかけとなり、「よのなか科」の授業につながった。

授業は隔週土曜日。昨年10月にスタートし、これまでに10回開催され、高校生14人、中学生17人が参加した。今までのテーマを37ページの表にした。

特徴は、授業の進め方にもある。最初に高校生がテーマごとに2時間かけてディスカッションを重ねた後、中高生混成のグループで同じ授業を受ける。このときに高校生は自然に中学生にアドバイスをしたり、リードしたりできるようになるという。

「中高生双方にいい学びの刺激となっています」（真鍋校長）

参加者の声を聞いてみた。高3の濱田理生（りお）さんは、小学校の先生になるのが夢だ。

「教えることと、『よのなか科』に興味があって参加しました。人に教えることの難しさを実感しました」

と話す。印象に残っているテーマは、「ケータイ／スマホとどう付き合うか？」。

「使用時間の最長は1日8時間、平均5時間。僕自身、1日3時間ほど使っていて、一年で莫大な時間になるので、時間を有効に使おうと思いました」（濱田さん）

高1の小林航大さんと池田佳菜子さんがともに印象に残ったテーマは「制服問題をディベートする」。

小林さんは制服派、池田さんは私服派。身近な問題で、お互いに意見を述べ合うのが楽しかったという。

「毎回、決まった答えがない問題について考え、いろいろな考え方があることがわかって良かった。最初は少し恥ずかしかったけれど、だんだん発言に抵抗感がなくなり、自分と他人の意見をまとめられるようになりました」（小林さん）

「今年も『よのなか科』を受け、昨年自分がしてもらったように、中学生にアドバイスしたい」（池田さん）

二人とも、参加後は能勢高校へ進学したいという思いが強くなったという。

授業を見た真鍋校長は、

「ALは大学入試で大きな武器になりますし、就職後も役立つはずです」

と手ごたえを話す。

「『よのなか科』を本校の魅力として打ち出したい」

大都市校にも地方校にも登場してきたアクティブ・ラーニング。生徒集めの切り札として、今後どこまで広がりをみせるだろうか。

庄村敦子